

『源氏物語』の大衆文化における変容 — 田辺聖子『新源氏物語』以降を対象に —

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヒラタ サナエ 平田 彩奈恵
所属等	神奈川大学経営学部 特任助教
プロフィール	早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士（文学）。 専門は『源氏物語』における歌ことば表現とその受容。 中学校・高等学校での国語科教員の経験を経て、古典を「生きた」ものとして現代の大衆が受容することではじめて、古典作品は継承されてゆくのではないかと思に至る。 その後、神奈川大学経営学部の講義「日本文学」等において、古典と現代とのつながりに着目した授業運営を行うなどの活動を行い、本研究の着想に至る。

1. 研究の概要

本研究は、『源氏物語』をもとにした現代の作品の中で、とくに大衆向けにつくられたものを取りあげ、『源氏物語』の本文からどのように改変されているかを中心に考察することを目的としたものである。多くの作品がある中で、田辺聖子『新源氏物語』と宝塚歌劇における『源氏物語』関連作品を中心に取り上げ、「歌」にかかわる表現をどのように扱っているかを分析した。

2. 研究の動機、目的

平安中期に成立した『源氏物語』は、平安末期には注釈書が登場するなど、成立当時から大きな反響を呼び、読み継がれてきた作品である。古典の金字塔のように扱われるこの物語は、そのものを丹念に精読してゆくだけでなく、その時代ごとにさまざまな形で「表現」されており、『源氏物語』は形を変えながら受容されている、「生きた」ものなのだと言える。

本研究はこのような『源氏物語』の受容史の中で、とくに現代の大衆文化の中に生まれた作品を取りあげ、『源氏物語』本文から変容している面に焦点化して考察することを目的とした。その中でも、一年という研究期間を考慮し、「歌ことば」に関わる表現を中心に検討した。これは、『源氏物語』に多用される、和歌にかかわる表現に対する理解が、『源氏物語』成立当時の読者と現代の大衆の間で大きく異なるとおもわれたからである。『源氏物語』本文に書かれた歌ことばを、ネガティブにとらえるなら「汲み取れない」現代の大衆は、『源氏物語』をどのように理解し、現代のものとしてとらえなおしてゆくのか、という観点から本研究を構想した。

3. 研究の結果

(1) 田辺聖子『新源氏物語』

数多くある田辺聖子の『源氏物語』関連作品の中ではもっとも忠実に訳されている『新源氏物語』であるが、それでも『源氏物語』にはほぼあられない「恋の闇」という表現が多用されていることが分かった。これは田辺が独自に設定した『新源氏物語』のテーマであると言え、現代の作品として『源氏物語』を捉えなおした例であると言って良いだろう。本研究の成果は、2018年11月に早稲田大学に提出した学位論文の一章にまとめている。

(2) 宝塚歌劇における『源氏物語』

宝塚歌劇は、『源氏物語』のみならず日本の古典作品を多く取り上げており、それをミュージカル形式で上演している。その中にあらわれる曲は、和歌とはまったく形式の異なるものではあるが、散文的であり、現代の「歌ことば」としての役割に沿って歌詞が作られている。『源氏物語』では散文の中で説明されるような情景を、登場人物の心情と併せて曲にするなど、さまざまな工夫が見られた。本研究の成果については、論文化に向けて準備中である。

4. これからの展望

一年間の研究期間では、限られた作品を個別に見てゆくにとどまり、現代の大衆文化において『源氏物語』がいかに変容し、多様化しているのかを見渡すことはかなわなかった。

今後の展望として、より多岐にわたるジャンル（漫画やアニメといった「表現」の形が異なるもの）を比較しながら見てゆくことで、『源氏物語』、ひいては古典作品が決して「変化しない」「新しく生まれることがない」ものではなく、今も変わり続けながら受け継がれているのだということを示したい。それは、現代の大衆が『源氏物語』を選んだということであり、残っているものを漫然と引き継いでいるのではなく、主体的な行動なのだとして社会に発信したいと考えている。

5. 社会に対するメッセージ

古典はとかく「変わらないもの」「新しく発見されることはないもの」と捉えられがちである。たしかに、作品の「存在」は、よほどの発見がなければ大幅に変わることはない。しかし、『源氏物語』であれば1000年以上の間、成立当時のままこの物語が受け継がれているとは言い難い。本文の言葉一つの写し間違いを取っても、そこから解釈が変わってしまうなど、さまざまな変容を遂げながら現代に至っているのである。そういった、意図しない変容のみならず、古典をその時代に合わせて変え、楽しむためのものとして再生産する試みはずっと行われ続けてきた。どのような改変を加えているのかを見ることで、現代における『源氏物語』のありよう、私たちがどのような『源氏物語』を選択したのかが見えてくる。古典を精読するだけが次世代に引き継ぐ行為ではなく、楽しみ、魅力を感じながら触れてゆく大衆の存在があっただけで古典は受容されてゆくのである。堅苦しく、正確に「読む」ことから一度離れ、どのような点におもしろみがあるのか、まずは触れてみてほしい。